

聖書：ローマ 8：26～30

説教題：御霊のとりなし

日時：2023年5月28日（朝拝）

数年前からペンテコステ記念礼拝の日にはローマ書8章の御言葉を順番に取り上げて見えています。このローマ書8章はローマ書全体の中でも一つの頂点と言える箇所です。特にクリスチャンの救いの確かさが力強く歌われています。これまでも述べてきましたが、8章1～30節までの間に聖霊を指す言葉は何と19回も出て来ます。つまり2節に1回以上は出て来る計算になります。このことはクリスチャンの確信に満ちた勝利の生活にはいかに聖霊の働きが欠かせないか、また聖霊に関する私たちの理解が重要かを物語っています。今日の箇所では26～27節に聖霊を指す言葉が原文では3回（日本語訳では4回）出て来ます。28～30節にはありません。ですから26～27節の二つの節に焦点を当てながら、その後続く節にも簡単に触れる形で今日の箇所を見て行きたいと思います。

まず26節は「同じように御霊も、弱い私たちを助けてくださいます」と始まります。直前の箇所では「希望」が苦難の中にある信者たちの忍耐深い歩みを導くことが語られました。イエス・キリストを信じてクリスチャンになり、救われた！と思っても、この世においては苦難があります。私たちが住むこの世界は天国ではありませんので、色々な苦しみがあります。しかしそんな私たちには素晴らしい将来が与えられています。その内容については今日は繰り返しません。その将来に対する「希望」は苦難の中にある私たちの歩みを支えてくれます。それと同じように御霊も弱い私たちを助けてくれる。「希望」が私たちを支えるばかりでなく「御霊」も弱い私たちを支えてくださる。そういうニュアンスがここにあるのかもしれない。

あるいはある人は8章15～16節に述べられた御霊の働きとの関連でここを理解します。私たちは御霊によって「アバ、父よ」と叫んで、父なる神に近づく者とされました。そして御霊は私たちが神の子どもであるとの喜ばしき確信を与えてくださいます。そのよう御霊の働きに加えて、もう一つ別の御霊の働きを記そうとして、パウロは「同じように」という表現をしたのだと取る人もいます。どちらであっても良いと思いますし、大きな問題にはならないと思います。いずれにせよ、この世にあって様々な苦しみの中にある私たちに対する御霊の特別な働きのことがここで言われるので

す。

その御霊は「弱い私たちを助けてくださる」とあります。この「助ける」という言葉はギリシャ語では3つの言葉を合成した言葉で、「ともに」「～に対して」「担う」という言葉の3つからなっています。つまり御霊は私のそばで一緒に私の重荷を担ってくださるというニュアンスです。一人で重いテーブルを運ぶことは大変でも、助けてくれる人が来て反対側を持ってくれたら随分楽に持ち運ぶことができます。これと同じ言葉は聖書で他に1回出て来るだけで、それはルカの福音書10章40節です。マルタとマリヤの話のところで、マリヤがいつまでもイエス様の話を聞いていることにしびれを切らした姉のマルタが、イエス様の前に行き出て行って「妹に私の手伝いをするように仰ってください！」とイエス様をも叱りつけた時のあの言葉です。マルタとしてはマリヤがそばに来て一緒に働きを担ってくれたら随分と助かります。聖霊はそのように助けてくださるということです。聖霊が全部の働きをするわけではありません。私たちが自分のすべきことに取り組む際、聖霊が私たちのそばで一緒にその重荷を担い、支え助けてくださるのです。

具体的に御霊は何をしてくださるのでしょうか。ここで焦点が当てられている私たちの弱さは祈りにおける弱さです。祈りは私たちが弱い者であることを告白する行為です。弱い私たちは祈りを通して神の力と恵みにより頼むことができます。これは特に苦しみの中にある者にとって慰めに満ちた手段です。ところがその祈りにおいて私たちは弱さを覚えるというのです。どういう弱さでしょうか。ここで注目されているのは「何をどう祈ったらよいか分からない」ということです。これは確かに私たちが日々の祈りにおいてぶつかっている問題ではないでしょうか。私たちは日々何を祈っているのでしょうか。健康が守られるよう、生活が守られるように、仕事がうまく行くように、家族が守られるように、将来が守られるように等と祈っていると思います。それは良いことです。しかしそれが私たちにとって最も祈るべきことなのでしょうか。祈りはせっかくの恵みの手段です。ならば私たちにはもっと心を注いで祈るべき重要な事柄があるはずではないでしょうか。なのに何を祈ったら良いのか分からない。そういう現実があると思います。

具体的な問題にぶつかった時もそうです。私たちはまずは、その問題が取り去られるようにと祈ります。病気なら癒されるように。あるいは困難な問題がなくなるよう

に。しかしなかなかそれが聞かれない場合があります。その時どう祈るべきでしょうか。続けてその問題を取り去ってくださいと祈るべきでしょうか。それとも問題はそのままでも、それに耐える力を与えてくださいと祈るべきでしょうか。ここでも私たちは何を祈ったら良いのか分からないという問題に直面します。参考になる例として、肉体のとげを取り去ってくださるよう祈ったパウロの祈りがあります。肉体のとげが何であったのかははっきり分かりませんが、パウロはそれを取り去ってくださいと何度も主に祈りました。それが無い方が神の国のためにより良く働けると思い、彼は必死に祈りました。しかし主の御心は「わたしの恵みはあなたに十分である」というものでした。あなたはそのままの状態でもより良く私の恵みにより頼み、神の栄光を現す生き方、働きができるということでした。そういう意味ではあのパウロも神の御心が最初は分かりませんでした。少なくとも彼が祈っていたことと主の御心は違いました。私たちも同じような状況に遭遇します。就職する会社を選ぶ時も、結婚相手を求める時も、日常起こって来る様々な問題に対処する時もそうです。もちろん私たちは聖書に明示されている神の御心に関する一般的原則を学び、そのガイドラインに沿って祈ります。しかし詳細となると分からない。自分の願っていることが主の御心になうことなのか・・・。そのため、これこれこのようにしてくださいと私たちの方で具体的なあり方を指定して祈ることができないのです。もちろん私たちは自分の願いとして具体的に祈って良いのですが、それが御心になっているのかどうか確信をもって祈ることができないのです。そのため、何をどう祈ったら良いか分からなくなるという状態に行き着くのです。これは地上にある間、私たちに付きまとう弱さと言えます。

では祈りにおいてモゴモゴしてしまう私たちの祈りには意味がないのでしょうか。神は私たちの祈りに聞こうとしてくださいますが、何を話しているか分からないと言って耳を閉じてしまわれるのでしょうか。そうではないのです。ここに「御霊ご自身が、ことばにならないうめきをもって、とりなしてくださる」とあります。何を祈ったら良いか分からず、うめく私たちを見て御霊は「そんなことも分からないのか」と突き放すのではなく、私たちとうめきをともにしつつ、とりなしてくださるのです。このようなお方が弱さを覚える私たちの祈りの場にもとおられるということこそ、大きな慰めであり、また励ましではないでしょうか。

27 節に御霊のとりなしは効果的であることが語られています。27 節最初の「人間

の心を探る方」とは神のことです。神は私たちの心の中を探り、それを知られる方です。Ⅰサムエル 16 章 7 節：「人はうわべを見るが、主は心を見る。」 詩篇 139 篇 1～4 節：「主よ あなたは私を探り知っておられます。あなたは私の座るのも立つのも知っておられ・・・ことばが私の舌にのぼる前になんと主よ あなたはそのすべてを知っておられます。」 神は私たちの心そのように見ておられる方として、私たちの心におられる御霊とその思いを知っておられます。ですから御霊がとりなして下さっていることを十分に知り、それを受け止めてくださいます。さらにその後素晴らしいことが言われています。それは「御霊は神のみこころにしたがって、聖徒たちのためにとりなしをしてくださる」ということです。神は御霊の思いを知っていますが、御霊は神の御心に一致することをもってとりなしをされます。Ⅰコリント 2 章 10 節：「御霊はすべてのことを、神の深みさえも探られるからです。」 御霊は神の御心を十分に知り、その御心に従ってとりなすので、御霊の祈りは確実に聞かれ、かなえられるのです。ここに私たちは改めて大事なことを確認します。それは祈りは神の御心に従ってささげられなければならないこと、そして神の御心にかなう祈りだけが聞かれるということです。Ⅰヨハネ 5 章 14 節：「何事でも神のみこころにしたがって願うなら、神は聞いてくださるということ、これこそ神に対して私たちが抱いている確信です。」

ある人は問うかもしれません。神の御心にかなうことだけしか聞かれないなら私たちの祈りに何の意味があるだろうか。神の御心と少しでも違えば、その祈りは聞かれないのかと。これに対する答えは、Yes です。今のような質問の背後にあるのは間違った考えで、それは私たちの考えの方が神の考えに勝っている、あるいは少なくともそういう場合があるという考えです。それは愚かな考えであり、傲慢な考えです。神の御心に勝る考えはありません。神は最善の御心を持っています。そうであるのに、人間が一生懸命そうでないことを祈り求めるから、根負けして、ついにはそれを聞いてやるというようなことが神にあり得るでしょうか。あるいは私たちは神が考えもつかなかったベストな案を神に提案し、神の方でも「そうか、そんな道があったか」と驚いて、そのような導きに変更して下さるという場合があるとでも考えているのでしょうか。そういうことはあり得ません。ですから祈りとは私たちの願いを神に押し付け、神に聞いてもらうための手段ではありません。私たちの祈りの方が上で、神がそれを聞いてご自分の御心を調整されるわけではありません。むしろ祈りとは私たちの願いを神の御心に合わせる場であり、神の御心にかなう祈りをするように私たちが造

り変えられるための場です。

ある人はこれを聞いてもなお問うかもしれません。もし神の御心しかないなら、祈りに何の意味があるのか。祈っても祈らなくても同じではないかと。そうではないのです。祈りは私たちが弱い者であることを認め、自分は神の恵みに依存していることを告白する行為です。私たちは祈りにおいて自分自身をわきまえ、神により頼む恵みに生きるべきです。そして大事なことは神が御心とされることを私たち自身の願いとし、私たちの意志として求めるということです。神の御心だから逆らえないと言って文句を言いながら従うのと、神の御心を自らも願って生きることとは雲泥の差があります。私たちが神の御心にかなうことを祈り求め、その祈りを通して神の御心にかなう最善のものを受け取るというのが正しい関係です。もちろん私たちが祈らなくても神が与えてくださっている恵みは沢山あります。しかし神は、私たちが祈り求めて、それを受けることを通常の方法として定めておられます（マタイ 7 章 7 節）。私たちは祈りにおいて、神の御心をわきまえ知り、その御心を自らも願い求めるというプロセスを通して、神と同じ考えを持ち、神と同じことを求め、神に似る者とされるという聖化の歩みを導かれて行くべきです。しかし私たちは御心が分からず、何をどのように祈れば良いか分からない時が多くあります。そのために言葉に詰まり、うめいてしまう。そんな時に御霊がとりなしてくださると言われているのです。完全に神の御心に一致するとりなしをもってです。祈りにおける弱さを覚える私たちにとってこれほどの慰めが他にあるでしょうか。御霊は最も良いことを祈ってくださるのです。そしてそのとりなしは神に必ず聞かれるのです。

その御霊のとりなしは続く 28～30 節に示されている神の御心と一致するものです。28～30 節に記されている神の究極的関心は私たちが御子に似る者とされることであることが、特に 29 節から分かります。それは聖化の歩みを経て、30 節最後に言われている栄光というゴールに達することです。そのために 28 節で神はすべてのことを働かせて益としてくださると言われています。ですからこの「益」とは私たちが益だと思ふことではなく、ここで言われている究極的な益すなわちキリストに似た者になることです。そのために神は苦難さえも用います。私たちの目にとても益とは思われないことも用います。しかし慰めはそのプロセスに一切無駄なことはないということです。神はすべてのことがともに働いて益となるよう導いてくださいます。永遠の昔に立てられたご計画に基づいて人を救いへと召し、召した人を義と認め、栄光に至

らせる歩みを確実に導いてくださいます。そのために御霊がとりなしてくださるということが今日の箇所です。34節ではキリストが天でとりなしてくださると述べられますが、天にとりなし手がいるだけでなく、私たちの心の内にも力強いとりなし手があると今日の箇所は語っていたのです。

私たちは御霊がこのようなとりなし手として今日も私たちとともにいてくださることを覚えて感謝したいと思います。私たちはどんな苦難の中にあっても一人ではありません。御霊が私たちの祈りにおいてともにいて、助けてくださいます。私たちは御霊がとりなしてくださるから、私は祈らなくても良いと考えてはなりません。26節の「助ける」という言葉に示されていたように、御霊はそばで一緒に担ってくださる方です。私の代わりに全部をする方ではありません。ですから私が祈ります。しかし私たちはそこで弱さを覚えます。何をどう祈ったらよいか分からなくてうめきまします。その時、この聖書の約束を思い起こしたいと思います。御霊が私たちを助けてくださいます。神の御心に完全に一致する祈りをもってとりなして下さっています。その御霊のとりなしを通して神は私たちを御心にかなう益へと導き、必ず最後の栄光に至るように導いてくださいます。そのことを見上げて一層祈りに励み、御霊の導きと祝福に豊かにあずかって行く者とされたいと思います。